

# 綿羊生産の展開と発展条件に関する研究

北海道における綿羊の生産流通を中心にして

## 【目次】

序章 問題の所在と研究課題の措定	第 1 章 綿羊の需要創出と新たな市場開拓
第 1 章 わが国における綿羊飼育の展開	第 1 節 国産羊肉の生産性が低い要因
第 1 節 綿羊飼養の初期的導入	第 2 節 国産羊肉の供給体制と流通機構の未整備状況
第 2 節 羊毛から羊肉への需要転換	第 3 節 綿羊製品化と地域ブランド化の模索
第 3 節 国産羊肉生産の停滞とその要因	第 4 節 綿羊を通じた地域再生の取り組み ～ 士別市を事例として～
第 4 節 綿羊飼育の改良普及の取り組み	第 2 章 国産の羊肉普及と北海道の綿羊の課題及び将来展望
第 2 章 北海道における綿羊産地の形成と発展	第 1 節 環境負荷の少ない畜種と土地・飼料の効率利用
第 1 節 綿羊の特徴と有効性、多様性	第 2 節 綿羊の飼養技術と品種の改良を通じた生産性向上 の課題
第 2 節 北海道の立地特性と飼養条件	第 3 節 綿羊と他の食肉・畜種との棲み分けの課題
第 3 節 綿羊の製品化と多様化	第 4 節 北海道発の地域ブランド形成のための課題
第 4 節 綿羊の改良と増殖のための取り組み	終章 総括と結論

## 【目的】

現在、国産綿羊はわが国において、家畜としても食肉としても普及率が低く、需要に地域差があるため、食肉市場ではマイナーな部門を形成していると言わざるを得ない。無関税のもと、安価で大量に輸入されている外国産羊肉に圧され、国産羊肉は一般的な食肉流通機構において行き場を無くしている。しかし、綿羊生産物の多様性や、家畜としての有益性を明らかにすることによって、土地が狭く資源が限られ、環境問題が深刻化している今日の日本において、非常に画期的な畜産業であることが見えてくる。綿羊流通構造の不備や諸問題の改善点を探求し、綿羊が「第 4 の家畜」として発展するための展望を明らかにすることが本論文の狙いである。

## 【方法】

課題へのアプローチとして、第 1 にわが国における綿羊の初期的導入期から歴史を追って現在に至るまでの経緯を明らかにし、国産羊肉生産が停滞している要因を明らかにする。第 2 に綿羊関連の文献・統計資料等を利用したデータ収集・分析、ならびに綿羊農場を営んでいる経営者の方々にヒアリング調査を行い、未整備流通機構の実態を明らかにし、綿羊活用方法の実例を挙げながら経営形態を探る。第 3 にそれまでに得た情報を元に分析し、綿羊飼育の存立及び発展条件を考察する。

## 【結論】

一時期の羊肉需要停滞期を経て、現在では羊肉の需要が拡大しつつあるが、日本で消費されている羊肉の多くは輸入品であり、国産は限られた流通ライン上での小規模取引が殆どだ。食肉として普及させるには、他の畜種にはない綿羊としての特性に着目したマーケティング戦略が必要であり、羊毛や羊乳等の綿羊が生み出す様々な副産物の有効性、多様性、家畜としての有益性、及び北海道の特化した魅力を活かし、食肉市場における隙間産業としての地位を確立し、輸入肉には無い確かな品質を強みに地域ブランド化を実現することが新たな国産羊肉市場を創出する糸口になる。そのためには安定した流通機構を形成する必要がある。屠畜場における綿羊専用ライン及び屠畜処理技術の確立と安定供給の実現が求められる。産仔率及び増体性の向上、綿羊飼養存立のための優良畜種確保、季節外繁殖技術の向上等の課題解決が急務であるが、現在日本の綿羊生産者が意欲的に技術向上及び綿羊の PR 活動に取り組んでおり、今後は生産者だけでなく、行政や支援機関、及び地域住民等が一体となり連携しつつ、地域経済発展を含めた戦略を構築し、積極的に活動していくことが、更なる綿羊生産発展への絶対条件である。

## 【参考文献】

- 石川光伸『綿羊盛衰の証人』2007 年  
社団法人 日本綿羊協会『新しいめん羊飼育方法』1988 年  
福井豊『めん羊の繁殖技術』1989 年

